

動画を活用した幼児と大学生の共感し合う体験の創出 — コロナ禍における保育者養成校の授業実践事例から —

Creating an Experience that Sympathizes with Infants and University Students Using Videos: From Lesson Practice Examples of a Nursery School Class under Coronavirus

(2022年3月31日受理)

廣 畑 まゆ美

Mayumi Hirohata

Key words : 幼児, 保育者養成, 共感, 人間関係, ICT, コロナ

要 旨

2019年より新型コロナウイルスによる世界的な混乱状態が継続している。多くの学校でリモート授業が導入され、実践的な授業では従来通りの学修形態で実施が難しい状況が多々発生している。しかし、保育者としての実践的な力を身につける上で、学生のうちから保育現場を観察したり、幼児や現役保育者と関わる実践を積み上げることは重要であるだろう。この状況に対する打開策を模索するため、地域のこども園に協力を仰ぎ、動画を活用した幼児と保育者養成校の学生が共感し合う活動を計画・実践したところ、幼児と学生が、その動画を通じて共感的な体験をするに至った。また、学生は自らが作成した動画で遊ぶ幼児の様子を見ることで、自分自身を客観視することの重要性を体験的に学ぶことができる機会を得た。今後の就学前教育におけるカリキュラム編成や、保育者養成校での学修形態を検討する上で参考となる事例が示唆されたと考える。

1. はじめに

2019年より新型コロナウイルスによる世界的な混乱状態が継続している（以降、このような状況全体を指し示す言葉として「コロナ禍」を用いる）。完全に収束する気配もなく、厚生労働省が示している「新しい生活様式」¹の実践例が集団・個人の生活において参考にされ、手洗い・うがい・消毒をこれまで以上に徹底し、三密（密集・密接・密着）を回避するよう促される日々がかれこれ2年継続している。この3つの密があつてこそ成り立っていた社会領域では生活様式の大きな変更を余儀なくされている。教育・保育の場などはまさにその典型だろう。筆者が勤務している保育者養成校においても、2021年度は、リモート授業が一時的に導入されたり、授業における保育所等施設への訪問が中止となったり、実習が度々延期になるなど、3密を伴う学修形態の変更が多々発生

した。しかし、保育者としての実践的な力を身につける上で、学生のうちから保育現場を観察したり、幼児や現役保育者と関わる実践を積み上げることは重要であるだろう。平成28年度に文部科学省が示した「幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程」のモデル図では、保育者としてのキャリアは、保育者養成校における学修期間から始まっていることが示されている²。保育者養成校での学修において、理論を知り、演習授業や実習等で実践を積み、知識・技能を蓄積していくものと考えられている。佐野（2010）は、実践的な学びは、学生の社会性の成熟度や知識量、その他の諸経験によって質的に異なってくる³と述べている。ゆえに、コロナ禍で実践を積み上げることのできない現状を、不測の事態と捉えて時が過ぎるのを待つのではなく、できる限り、なんらかの方法で実践できる可能性を見出す必要があるだろう。

この2年間で大学授業のオンライン化は急速に進ん

だ⁴。文部科学省が令和3年3月に行った「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」⁵では、大学生のオンライン授業に関する意識調査項目が設けられている。日々の報道等を見ると、オンライン授業はネガティブに捉えられがちであり、実際この調査の意見においても、理解のしにくさや、人との関わりが少ないことなど、教育の質に関わることに對する不満を抱いている学生（満足していない：5.7%、あまり満足していない：14.9%）が存在していることが明らかとなっている。それに対する見解として、「オンライン授業の実施に当たっては、学生の声を丁寧に聞き、質の向上に努めることが必要である」ということが言及されている⁷。しかし、意外なことに、全体的な満足度としては、不満に感じる割合より満足に感じる割合の方が多く、56.9%の学生が満足であると回答している。（満足：13.8%、ある程度満足：43.1%）⁸自分のペースで学べることや、場所の制約なく学べることが、とりわけ肯定的に捉えられている。同調査における、「国や学校に対する意見・要望」の項目で意見の詳細を見てみると「授業はオンラインでも良いが、ゼミや就職のための講座は対面が良い。」「オンラインでも、グループワークや教授からのフィードバックなど、一方通行ではない双方向のやり取りに関する工夫をしてほしい。」という意見があり、授業使用上の課題は存在するものの、オンラインでの授業に対して全面的に不満を持っているわけではないことがうかがえる⁹。効果的な使用方法の検討次第では学生にとって有効な手段となるのではないだろうか。

コロナ禍においてオンラインでのやりとり・ICT機器の活用方法は多種多様になった。「オンラインで」「ICT機器を駆使して」というと、何やら高度な技術が求められているように感じるが、今主流となっているzoom¹⁰やTeams¹¹などが話題になる以前はSkype¹²などのアプリが使用され、テレビ会議システムそのものは、かねてから活用されていた。しかし時代の潮流や社会的な制約によって、アプリは機能が増えたり、無駄がそぎ落とされて最適化し、今もなお進化している。そもそも存在していたテレビ会議システムが、時代のニーズとともに変化しているわけであるが、授業においても、改めて身近な機器を見直し活用することによって、簡単に誰かと対面

しているような感覚を得たり、実践的な授業に成り代わるものを生み出せるのではないかと考えた。単に授業を再現するようにリアルタイムをつなぐことだけに重きを置かず、「場」を作りコミュニケーションを図ることに意義が見出されることを中心的な視座においてみるとどうだろうか。

例えば、動画を活用することは有効な手段のひとつであると考え。ここ数年でYouTube等のアプリを活用した発信は相当世間に浸透している。視聴者は発信者とリアルタイムでつながっているわけではないが、動画を見ながら発信者が伝えたい様々なイメージを頭に巡らせることになる¹³。実際、就学前施設で登園自粛になった園では、保育者が遊びの動画を作成して配信したりするような事例が様々に紹介されていた¹⁴。しかしこのような動画を用いた手法も画期的というわけではない。かつてはテレビ番組等でもよく使われた手法で、例えば、田舎から都会で働く自分の子どもなど、物理的な距離がある人たちの間で「ビデオレター」を届ける番組企画¹⁵は、お茶の間で大変楽しまれていた。一見簡単そうな実践であるが、教育現場等では物理的な距離が生じることがほぼないためか、コロナ禍で改めて注目された実践方法であることに気が付いた。このような方法であれば、複雑な操作や接続不具合への対応が求められることがないため取り扱いもしやすい。データのやり取りも昨今であれば、動画配信サイトを使用することで、テープやディスクの現物を実際に持ち運んだり、郵送する必要すらなくなっている。動画を通して、コロナ禍で制約が生じている直接的な体験を補えるような学びの実践方法を検討したいと考えた。

このような手法での取り組みは、保育者養成校の学修における観点のみならず、幼児や保育者など保育現場の観点から見ても有効ではないだろうか。事実、就学前教育の過程においてもコロナ禍で人との関わりが限定的になってしまっていることは懸念が抱かれているところであろう。平成29年改訂、平成30年から施行された「幼稚園教育要領」の保育内容「人間関係」の領域では、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」という記載のもと3つのねらいが示されており、そのうちのひとつに「(2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したり

して一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもち¹⁶と明記されている。保育者を始め、他の子どもや様々な人との関わりを通して、「一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる¹⁷と述べられている。また、領域の内容13項目のなかには、「高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ¹⁸ことについても言及されている。近年、家庭においても地域においても人間関係が希薄化し、子どもたちの人と関わる力が弱まってきていると懸念されている。そのような状況の中で園において、地域の人たちと積極的に関わる体験をもつことは、人と関わる力を育てる上で大切である¹⁹と考えられている。子どもは、限られた人間関係の中で生活している²⁰、園においても、高齢者や異年齢の子ども、地域で働く人々等との交流を意識的に創出することが求められている。登園自粛や、外部との直接的な交流を控えることなどが叫ばれ、幼児の人との関わりを構築する援助を行う保育者に求められる役割も多様になっているのではないだろうか。大学は「知識基盤社会の重要な社会的インフラストラクチャーとして高い公共性を有する機関²¹であると言われている。地域の就学前施設に対して、施設からの依頼を待つのではなく、大学側から提案していくことも重要な役割のひとつであるだろう。

以上のようなことから、本研究では動画を活用し、コロナ禍における実践的な授業実践の在り方の模索と、幼児と保育者養成校の学生の共感し合う体験の創出を試みる。この実践にあたり、地域の幼保連携型認定こども園に協力いただいて検証を行う。そこでの実践を基に得られる学修効果を考察し、今後のカリキュラム編成に生かしたいと考える。

なお、本研究は匿名化された情報による、アンケート・聞き取り調査・授業活動内容等の事例報告である。

2. 実践内容

実践は地域の幼保連携型認定こども園（以降、Cこども園）の協力のもと、以下のような内容で行われた。

対象学生：A大学B学科1年生2クラス（計67名）

実施期間：2021年10月11日（月）～11月15日（月）

（授業5コマ分）

実施内容：

A大学B学科1年生が2, 3, 4, 5歳児を想定し、10～20分程度の遊びの動画を作成する。後日、Cこども園に動画を届けて、幼児たちが視聴する様子を記録してもらい、その遊びの様子を学生が動画で観察する。

使用機材：

大学における撮影や動画の視聴には、班に1台渡したGoogle Chromebook Lenovo ノートパソコン IdeaPad Slim350i (11.6インチHD Celeron 4GBメモリ 32GB SSD 日本語キーボード)を活用した。GIGAスクール構想でよく使用されているモデルで、本体にカメラが内蔵されており、撮影にも活用できる。Cこども園には、ビデオカメラ (HDR-CX470 32GB 光学30倍Handycam HDR-CX470)を貸与して記録を行ってもらった。Cこども園における動画再生については、ノートパソコンやプロジェクターを準備いただいた。

実施の流れ：実施は表1の通り。（色付きセルは授業日）

【表1】授業実施の流れ

日付	こども園先生の動き	学生・教員の動き
10/11(月)～15(金)	・アンケートの記入 ・幼児の日常生活の様子を撮影	・教員がアンケートの依頼、撮影機材・記録の回収。
10/18(月)		・授業にて、アンケート内容と動画の確認。
10/25(月)		・授業にて、遊びの計画、練習。
11/1(月)		・授業にて、遊びの計画、練習。
11/8(月)		・授業にて、動画撮影。計画内容を指導案として記入。
11/9(火)～13(土)	・教員が、作成した動画DVDとビデオカメラ、指導案を届ける。 ・幼児に動画で遊んでもらう時間を保育時間の中で作っていただき、視聴中の様子を撮影記録いただく。	・教員が、記録動画を編集し、こども園に持参。13日に機材回収。
11/15(月)		・記録動画の確認、活動の振り返り。

※「学生・教員の動き」について、特に記載がない場合は学生が行った実践内容である。

作成した動画内容とそのねらい：

2クラス8グループに分かれて、ひとつの年齢につき2種類の動画を作成した。(表2の通り。2歳児については各クラスに動画1種を作成した。)本来指導案で幼児の遊びを計画する際、幼児の日々の生活の様子を捉え、発達・興味関心などを踏まえて、今後の成長を期待したねらいを立てた。計画する際にその点の情報の不足を補うため、Cこども園の保育者にアンケートを依頼して、幼児の興味関心や、日ごろの視聴覚教材使用状況などを確認した。

5歳児については、アニメのキャラクターがクラスの中で流行しており、多くの幼児が興味関心を持っていることが保育者によるアンケートに記載されていた。また、日々様子が撮影された動画において、よく考えて、自分の言葉でしっかり話す様子が記録されていた。こうした姿を大切にしたいと学生は感じたようで、1クラス・2クラスとも興味関心のあるモチーフを使用したクイズ遊びを検討した。



【写真1】2クラス5歳児担当が作成した動画の一部

4歳児は、戦隊が登場するテレビ番組に凝っており、日々変身ごっこなどに興じていることが保育者によるアンケートに記載されていた。外遊びなど、身体をしっかり動かすことが好きであるという記載もあり、学生は1クラス・2クラスともダンスを計画した。それぞれ別の時間に検討しているが、たまたま同じ活動になったことが興味深い。2クラスではお面を手づくりする活動を加えて、そのお面をつけて「変身」して踊るようにし、幼児のたちの日々の姿に絡めた働きかけを活動の流れの中に入れ込んだ。



【写真2】2クラス4歳児担当が作成した動画の一部

3歳児クラスでは、保育者のアンケートから、キャラクターへの興味・関心が強いということと、制作あそびやブロック・粘土・お絵かきなどを日々行っているという情報が記載されていた。これをもとに学生は、現在楽しんでいる活動そのものではなく、新聞紙を使った遊びに取り組むこととし、発展的な要素を含めた計画を行った。動画作成にあたっては、インターネット上にある様々な動画を参考にしながら、説明と作業工程の実演を重ねて、折るプロセスを撮影した。



【写真3】1クラス3歳児担当が作成した動画の一部

2歳児クラスでは、なりきる遊びやルールのある遊びに興味関心があり、様々なキャラクターへの関心も強いとのことであった。1クラス・2クラスとも、学生の踊りの真似をさせる遊びを考案した。その際、ただ真似るだけでなく「ゾウさんになりきってみよう」などのお題を出し、お面を頭につけるプロセスを踏ませ、活動への関心を高める工夫を加えている。

【表2】学生が計画した実践内容とそのねらい

担当年齢	1クラス	2クラス
5歳児	内容：ジェスチャーゲーム ねらい：イメージを膨らませる。友達同士でコミュニケーションをとる。	内容：手遊び、クイズ（写真1参照） ねらい：道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合いの力を身につける。
4歳児	内容：ダンス（写真2参照） ねらい：友達と一緒に音楽に合わせて踊る楽しさを感じる。	内容：ダンス ねらい：記載なし
3歳児	内容：新聞紙あそび（写真3参照） ねらい：新聞がいろいろな形になることを楽しむ。	内容：手遊び ねらい：手先が器用になる。反射機能やリズム感がみにつく。
2歳児 （A組、B組）	内容：絵本の読み聞かせ、ダンス ねらい：友達と短時間の遊びを楽しめるようになる。	内容：お面づくり、ダンス（写真4参照） ねらい：友達の活動を見る。自分が役割を持って楽しく真似する。みんなで楽しむ。

※2歳児は1クラスがA組、2クラスがB組を担当している。
※4歳児を担当した2クラスは、「ねらい」の記載がなかった。

※「ねらい」は学生が記載した表現をそのまま表記している。



【写真4】2クラス2歳児担当の動画

以上のように、保育者からのアンケート等をもとに、非同期の状態では情報を仕入れ、学生なりに幼児の姿を捉えて、具体的な活動とそのねらいを検討した。こうして考えた内容は、想定される幼児の活動や、保育者の援助・配慮に対する指示を詳細に記載し、指導案にまとめて保育者に渡した。

3. 実践の結果

3-1. 幼児の様子

まず、幼児の様子について述べる。動画の中にいる「大学生のお兄さん・お姉さん」をよく見て、呼びかけなどに反応する様子などが見られた。5歳児は、好きなキャラクターが登場するたびに声をあげ、動画であることを存分に生かしたクイズゲームに多くの幼児が興奮してい

た様子であった。

4歳児は、2クラスともキャラクターのダンスに取り組んだ。戦隊モノの子ども向け番組が好きであることが分かっていたので、お面をつけて変身する行為を取り入れた。動画の編集機能を使用して、お面をつける動作なく学生の頭にお面が付いているような動画の流れにしたところ、よく見ていた幼児はそれに気が付き「アレ！」「なんか変わっている！」と声を上げ、反応していた。また、動画に映る学生の姿を見て「かわいい」と感想を漏らす声が女児の間でよく聴かれた。ダンスが始まってすぐはテンポが「早い」という声があちこちから上がったものの、何度も繰り返すことで、上達している様子が見受けられ、満足しているようだった。

3歳児については、最も個人差が大きかった。1クラスが考えた新聞紙遊びにおいて、スクリーンを見ながらスムーズに折り進めている幼児もいれば、折り方が分らず戸惑っている様子の幼児も記録されている。保育者が動画を適宜、一時停止しながら、途中補助を加えることによって全員折ることができた。ここまでは、おおむね学生が計画した通り、幼児たちは遊びに夢中となっていた。しかし、2歳児に関してはそうではなかった。動画の呼びかけに対して耳を傾け、時折反応するものの、動画を見ながら、自ら進んで身体を動かすには至らなかった。これは2歳児の両クラスともに起こった現象である。その状況から現場の保育者が機転を利かせて、動画の隣

に立って実際に踊って見せたところ、真似をして体を動かし始める姿が見られはじめた。(写真5, 6参照)



【写真5】矢印の箇所に保育者が1名ずつ前後に立ち、手本を実際に示すことによって、幼児たちは真似をし始めた。



【写真6】活動終了時の様子。前方にも保育者がいたことが理解できる。

3-2. 保育者のコメント

保育者には当日の進行を、学生が作成した指導案に沿って行ってもらった。実践して得た感想や意見はレポートとしてまとめてもらった。以下表のとおりである。(表3参照) 年齢による特性や、遊びに対する難易度はあるものの、映像を見ることに対する戸惑いや理解の遅れは感じなかったようである。5歳児では、もう少し難しい活動でも可能だったのではないかというコメントがあった。

【表3】各年齢児の遊びの様子

年齢	保育者の目から見た幼児の様子
5歳	遊びの趣旨を理解し、映像にもすぐに慣れ、遊びを楽しめた。
4歳	遊びの趣旨を理解し、映像にも慣れ、踊りを楽しんでいた。
3歳	一斉での活動は幼児の人数上難しかったので、高月齢児中心に小グループでの活動にした。取り組みの過程の達成度には個人差があったが、集中力途切れることなく興味をもって取り組んでいた。
2歳A組	映像に慣れるまで時間がかかった。映像は見るのみで踊りはしなかった。
2歳B組	映像に慣れるまで時間がかかった。保育者が動画の横で踊ると、一緒に踊ることができた。

3-3. 学生のコメント

最終授業日の11月15日、それぞれの班に渡している

chrome bookで動画を再生し、遊びの様子を観察した。その後、活動内容に対する振り返り等をワークシートに記入してもらった。ワークシートに設けた主な質問項目はつぎの通りである。

- ・振り返って感じたこと、考えたこと
- ・当初グループで計画したねらい通りであったかどうか
- ・保育者の援助や配慮で印象に残ったこと
- ・他のグループの活動を見て感じたこと
- ・今後の課題

学生の記述のほとんどに、自分たちが作成した動画を通じて幼児が遊んでくれている様子を嬉しく思っている気持ちが書き留められていた。直接触れ合うことができなくても、このような形でお互いの様子を知り、嬉しかったり、楽しかったりする気持ちを共有することができたように思ったことなどが記載され、動画のやり取りを行う意義を見出しているようであった。また、実践に対して省察を促す質問項目をいくつか設けていたが、その記載では自分自身を丁寧に分析している様子が多々見受けられた。(図1 学生コメント参照)

授業における撮影は、もちろん撮影であるため何度振り直しを行っても構わない。実際、何度か撮り直しを行って、学生たちには、自身の納得のいく内容を提出してもらっている。動画を見直す過程では特に気にならなかったはずだが、幼児が遊んでいる様子を見ることによって、自分たちの状態の問題点を改めて意識するようになっていたことは興味深い。また、一般的な幼児の発達として知る知識との差を目の当たりにしており、考えた活動の難易度が本当にふさわしかったのかと問い直すコメントも多く見受けられた。活動から様々な発見を得ており、深く省察しようとする姿が見られた。

○作成動画を振り返って感じたこと、考えたこと

練習の時から「あはははは」と言われていてその理由がとてもよく分かった。
自分たちが踊っているのを見て嬉しく思っている。
みんなが踊るのを見て嬉しく思っているのを見て嬉しかった。

○作成動画を振り返って感じたこと、考えたこと

・動きが速くて、破いイメージが多すぎていい。
・分断して踊るのはいい感じだったと思う。
・もう少し明るく振る舞った方が子どもたちもより喜ぶかなと感じた。

◎上記の子どもの様子から、当初グループで計画したねらいどおりの活動になっていましたか。

・ねえ、やってみるとやってみるとの差が大きい。
・やってみるとはやってみると。

・予定の活動を見ようと思ったと思う。20日は予定、30日は予定

をあげたほうがよい」「マスクを着用しているので目元でしっかり表情を出したほうがよい」と学生らに幾度か指摘をした。練習の過程で、意識をしているようで、だんだんと最初の様子からの変容が見られたものの、実際に幼児たちが学生らの動画を見ながら遊ぶ姿を見ることによって、ようやく何度も教員から執拗に言われる理由を体感したようである。対面する他者からの評価だけでなく、こうして自分自身が本当に第3者的な場所から、その様子を見ることで「これでは足りない」と思ったり「あのとき言われていた理由がわかった」「思ったよりもできている」という思考に結びつけることができる、ということが示唆されたのではないかと考える。

また指導案は、他の指導者が見て「追試」できることも視野に入れて記載するものである。動画で実践する保育者の様子を確認し、自分の作成した指導案の完成度を感じるに至った部分もあったようだ。特に2歳児の実践では、動画を見ても真似をしない幼児たちの様子から、「動画の横に保育者が立って取り組む」という即興的な対応を垣間見るようになった。これがなければ、動画の中で学生が幼児に促している身体的な活動の体験に至ることはなかっただろう。秋田（2020）は、保育現場では、幼児の育ちと活動や教育課程の内容と流れを吟味しながら実践することが求められる、と述べている。さらに、個々の幼児とのかかわりのなかで捉える即興的な思考と行動が必要とされる²⁴ことについても言及している。即興的な思考や行動について、大抵多くの参考書等で心構えは示されるものの、示されるのみで実際どのように行えばよいか具体的な指南されるわけではない。撮影した記録動画において、現場保育者の技を垣間見ることができたのは、幸運な出来事ではあったものの、こうした偶発的な出来事を記録する可能性もあることがわかり、興味深かった。

5. おわりに—まとめと今後の課題

本研究は、コロナ禍において直接的な関わりが制限される中でも、幼児と学生が組織的な枠組みを超えて共感し合う体験を創出するに至った一例を示すことができたのではないかと考える。ビデオレターのように動画を使う、原始的な方法を教室・組織を超えて実践したわけで

あるが、幼児の様子・保育者のコメント・学生のコメント等から、動画を用いたコミュニケーションには、直接的な人との関わりを補完する働きがあったことが理解できる。学生らは幼児が遊びに取り組む様子を嬉しく眺めたり、うまくいっていないところでは反省して自身の計画を見直すことを行っていたが、これは幼児の気持ちに寄り添っての行為であろう。授業における学修効果としても、「作成した自分たちの動画を見られているところを見る」という普段の実践にはないプロセスを体験し、省察力を促す有効な手段になったことがうかがえた。これは、コロナ禍の混乱が去った後の学修においても生かせる要素になりうる。

一方で難点もあった。多くの情報を取り込んだうえで動画制作に臨んだものの、思うように幼児たちが遊んでいない部分が見られたことである。そのような場合、現地の保育者の臨機応変な援助に活動を補完してもらっており、直接的な支えは不可欠であった。登園自粛のときに紹介された事例²⁵も家庭での保護者の援助を前提としている。動画のみではなく、その動画が視聴される環境（人・もの）や計画通りに進まなかった時のことについても想定が必要だと教えられた。また、幼児のICT活用やカリキュラムへの導入には懐疑的な意見もあることを忘れてはならない。ハンセン（2020）は幼児が早期スマートフォンに関わることにより記憶力や集中力、学習能力が低下することを指摘している。タブレット端末を使用した経験には、運動機能や、ものの形や素材の感覚を身につけることが考慮されていないことを指摘している²⁶。幼稚園教育要領第1章総則第4指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価3指導計画の作成上の留意事項（6）において、「幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること。」²⁷と明記されていることは見過ごせない。今回、幼児はおおむね楽しそうに取り組んでいたし、それを見て学生らも心を動かしているものの、直接的な関わりを持つには至っていない。学生はコロナ禍以前に蓄積した様々な実践的な経験があるため、今回の制約的な状況を「一時的なもの」と理解している前提がある。大人に比べて、直接的な体験が乏しいと思われる幼児の現状を踏まえ、幼稚園教育

要領が示す通り「直接的な体験を補完するものであること」を失念してはならないだろう。

共感という言葉の概念には「自分がその気持ちを体験しておくという前提が必要である」²⁸と述べているものもある。様々な価値体験を行う過程で、足りない部分を補うものとして、今回のような手法が補助的に活用できるという意識が必要だと考える。オンラインであろうがなかろうが、日ごろの直接的な人間関係がもたらすものを基盤にして人間関係の構築は現状行われている。今回も、近隣のこども園という地域特性から協力いただくことができた。こうした関係を丁寧に紡ぎながら、関わりを生み出す場を創出する意識が極めて重要だ。

長引くコロナ禍が、学生らに問いを与えるきっかけとなった。直接的な体験を補完するためにはどうしたらいいかという問いから、幼児の遊びを考えて取り組み、幼児と学生が共感し合う体験をなし得た。今回の動画を活用した実践は、生産性を高めるための機器利用ではなく、人間同士の信頼関係や、学びを深めるための補助的なものとして捉え、今後の用い方や関わり方を考えていくうえで示唆があったものと思われる。幼児は、人に対する優しさや愛情を人間関係の中で学んでいく²⁹と述べられているが、こうした経験は何も幼児だけでなく、全世代に当てはまることではないだろうか。コロナ禍がただ過ぎ去ることを待つのではなく、制約の生じる中で何を考えるか検討していく姿勢が必要だろう。

今回は幼児と学生に重きを置いた実践となったが、実際の活動の「場」を作った現役保育者の視点に深く迫れなかったことが課題に残る。文部科学省の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」（平成28年）においては、幼稚園等におけるカリキュラム・マネジメントについて「③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、家庭や地域の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。」³⁰と明記されている。また、文部科学省の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）（中教審第184号）」（平成27年）では、これからの時代に求められる教員の資質・能力について、ICTの活用に関する内容が明記されており、教師・保育

者に求められるスキルであることが叫ばれている³¹。大学と協同しながら検討を進めて行くことで、幼児の人間関係を広げながら取り組むことが可能になるとともに、理論と実践のバランスが取れたカリキュラム編成ができるようになるのではないだろうか。今後、協同的に課題解決を行っていきたいと考える。

最後に、三谷（2021）は、幼児の共感に対して佐伯胖（1939-）の言葉を用いて以下のように述べる。

「共感する」と言うと、なんだかその子だったり、虫だったりの気持ちがすべてお見通しといった感じで分かる、同じ気持ちになるということのように聞こえてしまう場合があると思います。しかし、そうではないのです。（中略）子どもの向いている先をとともにみて、ともに感じて（同じ気持ちなるということではない）、ともに喜んだり、悩んだりすることが重要なのです。」³²

それをどのように取り組むか。従来の手法が使用できなければ、共感はできないのだろうか。今回の事例を俯瞰し、幼児が活動に取り組んだ様子や、学生の一連の活動やコメントからそうではないと考える。今回の実践でも制約の中で従来にはない、新たな体験があり、コロナ禍以後でも活用できる方法が見出されている。「子どもの向いている先をとともにみる」ということを中心的な視座に据え、これまでの「手段」や「こうあるべき」という既成概念にとらわれない柔軟な思考から生まれる手段を大いに磨いていくことが今後もさらに求められるだろう。今回の実践を基盤に、今後さらなる検討を進めて行きたい。

註

¹ 新型コロナウイルス感染症専門家会議からの提言を踏まえ、厚生労働省が日常生活における新型コロナウイルス対策を具体的にイメージできるように示した実践例。

² 平成28年度文部科学省「幼児期の教育内容等進化・充実調査研究委託」「幼稚園教諭・保育教諭の研修ガイドⅢ-実践の中核を担うミドルリーダー養成-」（保育教諭養成課程研究会）の資料に示されたモデル

図では、「幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程は、保育者養成校での養成段階から始まっていることが明記されている。https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/19/1385791_5.pdf

(最終閲覧日：令和4年3月25日)

³佐野美奈 (2010)「保育所実習(保育実習1)と保育実習Eの実践的な学びによる教育的効果2006年度から2008年度までの保育所実習(保育実習1)と保育実習Eの自己評価と現場評価の調査結果をもとに『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』9, 203-217.

⁴株式会社日経BPコンサルティング(東京都港区)は、全国の大学・短大・高等専門学校(以下高専)を対象とした「高等教育におけるオンライン教育実態基礎調査」において、調査に回答した大学・短大・高専320校の内、2020年度(令和2年度)の「オンライン授業」実施率は96.8%(310校)であることを報告している。ほとんどの大学・短大・高専で「オンライン授業」が実施されたことがわかる。(調査実施は2021年6月)。

<https://consult.nikkeibp.co.jp/info/news/2021/0805sub/>(最終閲覧日：令和4年3月24日)

⁵今後の国及び大学等における学生への支援策の検討に役立つため、国立教育政策研究所及び大学等の協力を得て、文科省が作成したWEBサイトより、学生が直接回答を行った調査。無作為に抽出した学生約3,000名のうち、有効回答者は1,744名であった。実施期間は、令和3年3月5日～27日。(https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)(最終閲覧日：令和4年3月23日)

⁶4と同じ。

⁷4と同じ。

⁸4と同じ。

⁹4と同じ。

¹⁰Zoomビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した無料Web会議サービスの名称(機能によっては有料)。会議URL,パスワード等を知ってアクセスすれば、どこからでも会議に参加することができる。

¹¹マイクロソフトがWindows、macOS、Linux、iOS及びAndroid向けに開発・提供している会議システム。Microsoft 365アプリケーションの一部。

¹²マイクロソフトが提供しているWeb会議、インターネット電話を行うことができる企業向けソフトウェア。Teamsへの以降が決定しており、Skype for Businessは段階的に廃止されることが決まっている。

¹³昨今動画配信アプリにおいても、最新ニュースやイベントをリアルタイムで配信する手法がよく使用されている。

¹⁴文部科学省は、「学習支援コンテンツポータルサイト」(子どもの学び応援サイト)にて、幼稚園や認定こども園が臨時休業等を行った場合に実施した幼児・保護者等に対する、各園の様々な実践事例をPDFで紹介している。https://www.mext.go.jp/content/20200512-mxt_youji-000005336_002.pdf(令和2年5月13日時点)(最終閲覧日：令和4年3月23日)また、令和4年3月18日改訂で「幼稚園等再開後の取り組み事例集」を紹介し、再開後の教育活動にうまくつなげている例や保護者支援等も追加で紹介しており、今後の現場における参考になるよう示している。

https://www.mext.go.jp/content/20220316-mxt_youji-000005336_1.pdf(最終閲覧日：令和4年3月23日)

¹⁵平成4年～16年まで放送された「さんまのsuperからくりテレビ」(TBS系列)では、放送開始から4年後の平成8年より「からくりビデオレター」というコーナーが設けられ、普段伝えられない思いを動画に収めて送り届けるコンセプトで紹介されていた。内容は喜怒哀楽様々な感情を含むもので、番組放送終了まで人気を博したコーナーであった。

¹⁶文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」フレーベル館、幼稚園教育要領, p.167

¹⁷文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」フレーベル館, p.167

¹⁸文部科学省「幼稚園教育要領」における人間関係のねらい, p.13

https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf

(最終閲覧日：令和4年3月25日)

¹⁹ 8と同じ。p. 181

²⁰ 8と同じ。 p. 191

²¹ 公益財団法人日本高等教育評価機構「平成30年度版(平成29年4月改訂) 大学機関別認証評価 評価基準」p. 1

²² 『最新 心理学事典』

²³ NHK放送文化研究所「幼児視聴率調査」(2021年実施)の内容を参照した。

https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20211201_5.pdf

²⁴ 秋田喜代美(2020)「第6章保育者に求められるもの 第2節 専門性としての実践的思考とカリキュラム作り」『新時代の保育双書 保育内容人間関係[第2版]』(濱名浩編)株式会社みらい, p. 103

²⁵ 13と同じ。

²⁶ アンデシュ・ハンセン(2021)『スマホ脳』(久山葉子訳) p. 177

²⁷ 文部科学省「幼稚園教育要領」p. 9

https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf
(最終閲覧日：令和4年3月25日)

²⁸ 日本大百科全書(ニッポニカ)において、花沢成一(1930-2006)は、共感とは、ある人(他人)がまずある感情を体験しているということが前提条件で、その感情の表出を観察者(自分)がみて、自分も同じような感情を体験すること、と説明している。

<https://kotobank.jp/word/%E5%85%B1%E6%84%9F-477908#:~:text=%E3%81%8D%E3%82%87%E3%81%86%E2%80%90%E3%81%8B%E3%82%93%E3%80%90%E5%85%B1%E6%84%9F%E3%80%91,%E5%90%8C%E6%84%9F%E3%80%82> (最終閲覧日：令和4年3月25日)

²⁹ 文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」フレーベル館, p. 191

³⁰ 文部科学省「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」(平成28年)

³¹ 文部科学省「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)(中教審第184号)」(平成27年)

³² 三谷大紀(2021)「第2章 子どもとともにあるおと

なのあり方』『子どもを「人間としてみる」ということ一』(子どもと保育総合研究所編)ミネルヴァ書房, 第5刷, p. 145-147

